第７２４号　ヤスクニ通信 ２０１５年５月１０日

日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

 **《祈りのために》**

過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知り、世にいる自分のものたちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

(ヨハネ１３：１　口語訳)

　この御言葉の後に続く出来事は、主イエスが聖晩餐を制定された過越の食事の前日のことである。イエスと十二人の弟子たちが食事の席についたとき、「イエスは立ち上がって、上着を脱ぎ、てぬぐいをとって腰に巻き、それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた」と聖書は記している。おそらく弟子たちはあっけにとらわれたことであろう。いつか六本木にある国立美術館で《ペテロの足を洗うキリスト》と題した絵画に接する機会があった。渾身を込めて描いた画家の信仰を共有することが出来た思いがした。複雑な思いを表現しているペトロはじっとこらえているようである。そのペトロの足をぬぐうイエスの姿は一介の召使の姿である。周りでは弟子たちがそれぞれの思いを抱いてイエスの行為を眺めている。ペトロの番になったとき、彼は、「主よ、あなたがわたしの足をお洗いになるのですか」と言った。ペトロはイエスの行為の真意を理解していなかったのであろう。続けて、ペトロは「わたしの足を決して洗わないで下さい」と言った。イエスはそれに答えられて「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたとわたしの係わりもなくなる」とおっしゃった。イエスは十字架に架けられ、自らの命を献げて、私達の罪を贖われようとされていたことを示されたのである。弟子たちがイエスの行動を完全に理解するにはイエスご自身が栄光をお受けになるときまで待たなければならなかった（ヨハネ１６：１４）。イエスはまた食事の席に戻られて、「・・・主であリ、また教師であるわたしが、足を洗ったからには、あなたがたもまた、互いに足を洗い合うべきである」と。主の聖晩餐に招かれている私たちに伝えた主の御言葉である。

　この方こそ　私達の恵みの主であり王である。

　娘シオンよ　大いに踊れ。

娘エルサレムよ　歓呼の声をあげよ。

見よ、あなたの王が来る。

彼は神に従い　勝利を与えられた者。

高ぶることなく　ろばに乗ってくる。

雌ろばの子であるろばに乗ってくる。

わたしはエフライムから戦車を　エルサレムから軍馬を断つ。

戦いの弓は断たれ　諸国の民に平和が告げられる。

彼の支配は海から海へ　大河から地の果てにまで及ぶ。　（ゼカリヤ９：９－１０）

 山口俊夫（小平教会長老、大会靖国神社問題特別委員会委員）

ヤスクニ問題と宇都宮松原教会の取り組み

渡部静子（宇都宮松原教会牧師）

ヤスクニ問題に関して、宇都宮松原教会でどのように取り組んできたか、総会資料や週報を繰りながら、記してみたい。

１．大会靖国神社問題特別委員会から毎月送られる「ヤスクニ通信」に関して

礼拝に続いて、一人が朗読し、一人が祈る。2001年からは朗読と祈りの備えをする

ため第三主日に変更。その時、「祈りのすすめ」献金としてワンコイン献金をする。そ

れを1年分まとめ、3か所位の「教会と国家」に関する活動支援に用いる。それが1984

年から始まり、これまで「日曜日訴訟」「中谷康子さんを支える会」「岩手靖国違憲訴

訟を支える会」「大嘗祭問題署名運動センター」「バンザイ訴訟の会」「チェルノブイ

リとキリスト者九州」「『慰安婦』問題関連」「砂川政教分離訴訟を支える会」「沖縄・

辺野古の闘い」等に送付してきた。

２．教会の中に「靖国問題委員会」を発足させたのは1989年
「天皇の代替わりをきっかけに新しい天皇制が台頭しようとしているという危機感

の中で、過去の歴史を正しく学び、第二次世界大戦時に教会のしたことを明らかにし、

教会の子どもたちに対しても正しい信仰のあり方を継承させる必要を覚える」と、

1989年の総会資料に記載。毎年8月最終主日に、靖国問題学習会を実施。その内容

は教会報に報告。近年のテーマは、「集団的自衛権問題を考える」「なぜ、憲法96条

『改正』なのか」「原子力発電をキリスト者としてどう考えるか」等。今年はそのほか

に4月と6月にもミニ学習会を実施。他、地方紙に「非核三原則を守り、平和を目指

す意見広告」、諸署名活動に協力。

３．週日の学びのテキスト
渡辺信夫著「今、教会を考える」、武田武長著「世のために存在する教会」等を月1

度のペースで、それぞれ数年かけて学んだ。

４．栃木県政教分離を守る会

　毎年2月11日に「2.11信教の自由を守る栃木県集会」をプロテスタント諸教派と共同で実施。1979年から続いている。県内の日本キリスト改革派教会、日本基督教団、日本ナザレン教団、日本バプテスト連盟、日本福音キリスト教会連合、福音伝道教団、そして日本キリスト教会が名を連ねる。2001年には教科書問題が起こり、2回の勉強会を実施。それ以来、課題を日常的に共有する必要を確認し、現在は4月6月8月10月に例会を行い、この時代の、日本における教会とキリスト者の課題を分かち合っている。

　　最後に、4月に行われた例会について報告したい。この日のテーマは、「ホーリネスの群の弾圧を学ぶ」－弾圧70年記念誌から－　発題は日本基督教団の牧師。また、中国の撫順ホーリネス教会で弾圧を経験した人（85歳）の証言を聞いた。教団にあるホーリネスの群れは、弾圧を受けた6月26日前後の主日に「弾圧記念礼拝」を毎年行うとのこと。また、弾圧70周年を記念して「リバイバルと弾圧」の書籍を発行している（2012年）。

５．結び　かつて、在日大韓基督教会の関東地方会に出席した折り、会場であった横浜教会の創立80周年記念祝賀会もその中で行なわれた。「写真スライドによる教会の歩み」の紹介では、第二次世界大戦時の教会弾圧や横浜大空襲による教会堂焼失の写真もあり、自らの教会の歴史が眼と心に刻まれ、継承されていることを改めて知らされた。

　　日本キリスト教会が在日大韓基督教会と、また台湾基督長老教会と宣教協約を結んだ時、戦時の罪責と謝罪が告白されている。これらは日本キリスト教会の中にどれだけ浸透し、継承されているのだろうか。

　　近現代の歴史が学校教育の中で正しく教えられない現状にあって、教会がその歴史としっかり向き合い、継承していくことは共に歩む未来を真実に形成するのだと思う。戦後70年はその節目である。

**＜良書紹介＞**

**『行動する預言者崔昌華』田中伸尚著**（岩波書店、2014年、3000円＋税）**を読んで**

　小生は指紋押捺拒否の問題で娘たち（長女善愛さん、次女善恵さん）らと共に戦った人として在日大韓基督教会小倉教会の崔昌華（チォエチャンホア）牧師のお名前を記憶していた。またこの書物の著者田中伸尚氏は靖国神社問題の講演を幾度か聞いたことがあったし、また「大逆事件」に関する著作も記憶にあったので、両者の結びつきに興味を覚えて書店でこの本を見付けた時すぐに購入し読んだ。久し振りに一気に興味深く読んでしまった伝記である。

　その時まで「金嬉老事件」と呼ばれた静岡県の寸又峡での立て籠り事件のことは記憶にあったが、崔牧師との関わりは全く考え及ばなかった。

　しかし、本書を読んで改めて牧師の仕事とは何なのか、人権感覚を鋭くし、在日の人々と共にその苦しみを担うことが、一人の牧師の本来のつとめと結びつくことが、その必然がよくわかるように思った。

　崔牧師の日本渡来までの苦難の歴史、朝鮮半島の最北の熱心なキリスト者の家庭に、その４代目として生を受け、北朝鮮の共産化と共に安住の地を求めて脱北、南下し済州島で更なる苦難を経験し日本に単独渡来した時は24歳であった。翌1955年４月に神戸改革派神学校に学ぶ道が開かれ、1958年に卒業して宝塚で在日の小学校で教えながら宝塚の開拓伝道に携わり、そこで在日の人たちの差別の現実を経験した。1960年暮に小倉教会牧師として赴任してから大学で法律を学び、「在日韓国人の法的地位」と題する卒論を書いて、さらに福岡の大学の大学院でその方面の研究を続けた。

　そのようにして在日の人々の人権問題に関心をいだき、「法律」の学びを重ねる中で「金嬉老事件」に遭遇した。それまではいわゆる「社会派」の牧師でなく、どちらかと言えば「教会派」、伝道に専心するタイプの牧師であった。在日教会の牧師たちと日本の教会の牧師たちが「民主化闘争」や「南北統一問題」に関心を寄せる時も、あまり熱心ではなかった。もちろんビザなく日本に渡来した人たち、特に北からの人たちが大韓民国中央情報部（KCIA）の厳しい監視下にあったこともその背後にあったに相違ない。しかし、そのような事情の中にあった牧師の目に「金嬉老事件」のテレビ報道が飛び込んできた。その時、崔牧師はそれを座視していることができずに、周りの人たちが止めるのも聞かずに静岡、寸又峡に出向いて行く。犯人金嬉老の隣人として、一人の伝道者として説得に努めようとする。その記述を読みながら小生は主のみ言葉を思い起した。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない」（ヨハネ福音書10章16節）

　これまでの崔牧師自身の経験と学びが、在日の一人の犯罪者の苦悩を目のあたりにした時、崔牧師はその人に自ら近付き、寄り添い、その苦しみの理解者として伝道者ならではの行動に走った。周りがどれほど反対しても、そこに神から遣わされた者としての使命感に火が付いた。そのようにして崔牧師は犯罪者金嬉老と終生関わりを持ち続けたのであった。

　牧師が時の社会問題と関わる内的必然が、その本来の使命感とどのように関わるのか。その深みに触れないまま、時流に流されて社会的関心は時と共に薄らぎどこかに消え失せてしまう。最近の日本の右傾化と伝道の困難さに手も足も出ない私共が、改めて神さまの前に、自分たちの歩みを前に進める内的必然と使命を考えさせてくれる好著であるに相違ない。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　久保義宣（東京中央伝道所牧師）

**＜九州・沖縄からの便り＞**

**「私たちは沖縄県内の新基地建設に反対する」**

第63回定期九州中会（3月19日）は、上記の声明文を出した。また第64回定期東京中会（3月24日）は、九州中会声明文に賛同することを決議した。その声明文の内容は、

「2013年1月、沖縄の全41市町村首長はオスプレイ配備撤回と県内移設基地の建設を断念するよう、政府に求める建白書に署名した。また名護市民は2014年1月、辺野古新基地建設反対の市長を再選して「基地との共存を拒否する意志」を明確にした。さらに2014年11月の知事選挙では、沖縄県民は辺野古新基地建設反対の知事を選び、その年の12月の衆議院選挙でも新基地反対の立候補者を選んで、民意を明らかにした。それでも日本政府の姿勢は一向に変わらず、新基地建設を強行している。

|  |
| --- |
| 724号ヤスクニ通信　2015年5月10日発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 発行人　栗田英昭　編集 川越弘印刷発行 篠塚予奈（東京告白教会）〒157-0061東京都世田谷区北烏山1-51-12 　TEL＆FAX03-3300-6529 |

沖縄住民のもつ自己決定権は尊重されなければならない。沖縄・琉球のこれまでの歴史を顧みれば、なおさらのこと政府また日本国民全体が、沖縄の基地負担の痛みを自分たちの痛みとして受け止めなければならない。

私たちは沖縄を差別して踏みにじっている日本国政府に、無意識に同調して、結果として差別に加担してきたことを、神の前に悔い改めざるを得ない。沖縄の人々とともに、沖縄県内の新基地建設反対の声を上げ、政府にその計画の撤回を求める。2015年3月21日（提案者　沖縄伝道所、宜野湾告白伝道所）」

**辺野古基金**

目的=移設反対の民意を国内外に発信する。寄付を広く募って、国内や米国の新聞に 移設反対を訴える意見広告を掲載し、さまざまな活動費に充てる。趣意書「辺野古新基地建設を強行する政府の行為は県民の意志を侮辱し、 民主主義と地方自治の根幹を破壊する暴挙だ。沖縄の声を国内外に発信し、県内移設を断念させる運動の前進を図るために物心両面から支援を行う」。問い合わせ、基金事務局金秀本社098（943）6745。

**＊2015年度各中会ヤスクニ問題委員会委員名簿の訂正**

先月号の上記の名簿の訂正をいたします。

近畿中会「教会と国家に関する委員会」の小林正（高槻教会）を、澤田磐雄（西宮中央教会）に、九州中会「ヤスクニ問題特別委員会」秦博記（会計・大分中央教会）を、一之瀬穂積（柳川教会）に訂正いたします。